

信 毎 俳 壇

今井 聖 選

内股の熊が二股の鉄砲撃ち

傘寿過ぎ其のことも知りつくし

十月やグラタン食べず逝きし母

待合室葱の匂ひの友と会ふ

採血管一本満たすや暮の秋

立食ひのデニムのほつれ秋の雨

鰯舌と真鮫が並び日向ぼし

柿實の夢の中でも皮をむく

播揚げの小海老の目玉秋深し

菊の香や正しきことの息苦し

佳作

朝刊をさばく匂ひや草紅葉

ミサイルを飛ばす隣国秋の朝

(塩尻市) 神戸 千寛

(佐久市) 市川小夜子

(松本市) 田中しほす

(長野市) 大島 昇

(飯田市) 吉沢 奨

(長野市) 原田 浩生

(箕輪町) 向山 政俊

(佐久市) 水間喜美子

(松本市) 伊藤 和夫

(飯綱町) 小林 紀子

(長野市) 武田 芳子

(松川村) 岡 豊村

一句目、熊の情報が世にあふれ熊を詠んだ俳句も流行だが、この句は対峙する二者の体形の特徴を描写して独自性がある。衆におもねる姿勢と一線を画す。二句目、其と傘寿は直接的な関係はない

一句目、熊の情報が世にあふれ熊を詠んだ俳句も流行だが、この句は対峙する二者の体形の特徴を描写して独自性がある。衆におもねる姿勢と一線を画す。二句目、其と傘寿は直接的な関係はない

選評

神野 紗希 選

深眠の櫻木舐る冬の鹿

秋冷やホットミルクの膜を食む

退屈な洗顔 冬はすぐとなり

君去りて秋の長さよ砂時計

大皿の粗煮に目玉冬来る

横たへば軋むベッドよ秋寒し

木の葉より草の葉に寄る赤蜻蛉

秒針のリズム乱れて蚯蚓鳴く

地にマグマ天にUFO山眠る

野尻湖や素風太古の昔より

佳作

浅き夢忘れてしまひ霧の朝

香煙のひとりとひとりに暮る秋

(小諸市) 加藤 陽介

(長野市) 福沢 ナナ

(塩尻市) 神戸 千寛

(松本市) 平林 大高

(長野市) 荻原 宏祐

(岡谷市) 吉池富貴男

(飯綱町) 坂井 寿男

(松本市) 伊藤 和夫

(中野市) 芋川 菊水

(飯綱町) 小林 紀子

(小海町) 井上とみ子

(長野市) 松戸しづか

一句目、来たるべき春へと深く眠る桜の幹を、鹿は舐って生をつなぐ。「深眠」「櫻木」、硬質な言葉が張り詰めた冬の気配を伝える。二句目、ホットミルクの膜の柔らかな温度に、秋の空気の冷えが

一句目、来たるべき春へと深く眠る桜の幹を、鹿は舐って生をつなぐ。「深眠」「櫻木」、硬質な言葉が張り詰めた冬の気配を伝える。二句目、ホットミルクの膜の柔らかな温度に、秋の空気の冷えが

選評

坊城 俊樹 選

茸狩や縄文人の子孫たち

山眠る櫓の大樹に爪の傷

行く秋や即身仏の小さき膝

枯野行く上杉軍の帰還跡

椋鳥騒ぎ内に律する事があり

べんがらの瑠璃子声ともる秋の暮

茸狩鈴よく響く山日和

金槌の響きが跳める鬼胡桃

空に透き翹に力学ある蜻蛉

紅絹裏の母の衣解く小春かな

佳作

冴ゆる夜キャロルキングの唄滲む

冷ましや空地に残る裸婦の像

(下諏訪町) 中村 久

(小諸市) 加藤 陽介

(小海町) 依田 久代

(飯綱町) 寺島 渉

(大町市) 丸山めぐみ

(佐久市) 佐藤 勝子

(佐久市) 飯島八代恵

(長野市) 長岡 克彦

(飯島町) 横山 真弓

(長野市) 福沢 ナナ

(茅野市) 樋口 正彦

(須坂市) 富田 孝弘

の跡が、これは熊のもの。果たして熊はまだ其処いらを徘徊しているのか。三句目、この即身仏とは高僧などのミイラ。秋が深まる現代人への救済の心がこの小さく縮んだ膝に宿っている。

一句目、現代の日本人は皆縄文人の子孫。大昔から山で茸などを採取してきた。この山の茸もその頃の子孫かも。果たしないロマン。二句目、真冬の山中にナラの大樹がある。よく見ると此処に爪

選評